



## 丁野大阪本店長へのインタビュー

(敬称略)

(竹内) それでは、インタビューを始めさせていただきます。これまでの機材センターの100年の歩みを振り返って、機材センターが求められている役割・期待について再確認をさせていただこうと考えています。いただきましたお言葉は、所員のモチベーションアップにつながりますし、今後予定している機材センターのあるべき姿検討会や座談会等様々な討議の場で活用させていただきます。

では、先ずビデオをご覧になっていただいて、それから本題に入らせていただきます。

### 【これまでの機材センター活動に関する印象及び思い出について】

(竹内) ビデオでご紹介させていただいた機材センターの様々な活動をふまえて、これまでの思い出を振り返っていただきたいと思います。

(丁野) 私が入社した1985年はちょうどバブル前で、作業所もだんだんと忙しくなっている時期でした。入社して右も左も分からない状態のころ、杭工事や山留工事に関して、機材センターの方々に色々なことを教えてもらいました。

親子2代に亘って作業所でお世話になった方もいます。そういった親子世代に亘って続いているということが、機材センターの歴史の長さを感じます。我々は機械関係についてそれ程詳しくはないので、そこは機材センターのそれぞれの専門家に教えてもらいながら工事を進めていました。若い時も所長になってからも、クレーンの組立・解体や、様々な揚重機やエレベーター等で、とても頼りにしていました。オリックス西本町作業所で所長をした時も、免震工事の施工管理は機材センターにお願いしましたね。

(森田) 杭工事もそうですね。当社で開発した多段拡径杭工事でした。

(丁野) オリックス西本町作業所の時は、自動昇降型枠 Doka を採用しましたが、初めて日

本で使うということで、随分プレッシャーがありましたけど、機材センターが色々と支えてくれましたね。

最初に材料だけを見たときは、その多さに驚きました。それでも上手く上がっていきました。遠くから見たら、何か黄色い型枠が自動で上がっていく、感動したのを覚えています。そういう思い出がありますね。

そしてやはり、私達の若い時代に大阪でエポックになった、梅田スカイビルが印象に残っています。

あそこでリフトアップをやりましたね。私達は、皆で応援に行きました。

応援に行った私達は、ワイヤーが巻き取られるところをずっとチェックしたりしていました。やっぱりそれは思い出に残っていますね。それから、門真スポーツセンターのプッシュアップですね。

あの頃私達は 30 代でしたので、技術的にもいろいろ吸収するところが多かったです。そんな思い出が残っています。

#### 【生産性向上に関する取り組みについて】

( 丁野 ) これからはロボット開発です。BIM と連携した新しい技術がこれから必ず求められてきます。特に私が期待しているのは、墨出しロボットです。これが本当に精度良く 24 時間墨を出してくれれば、生産性向上に大きく貢献します。その様な開発をぜひ行って欲しいです。実質的にはやはり作業所の重労働で手間のかかる作業はロボットで行う、という事がこれからは求められると思います。例えば、耐火被覆とか溶接などですね。こういったものが自動化されていくのは、良いことだと思います。重量物を揚げるアップローとか、そういう機械も助かります。設備配管は、とても重たいので。

( 森田 ) 高齢化の問題もありますし。

( 丁野 ) そうですね。ここ数年、私はずっとベストフロントローディングと言っています。出来るだけ川上にシフトして、建物全体の生産性を上げるという話です。それが働き方改革にも繋がってくるのです。これからはプロセスについてもその良否が求められます。つまり、会社の経営理念でもある“最良の作品を世に遺し、社会に貢献する”において、最良の作品を、最良のプロセスとスピードで提供しているという事です。故に、早ければ良いということではなく、やはりワークライフバランスを皆が実現しながら、お客様にとっても、ベストなスピード、プロセスというものを今は強く求められていて、ロボット化も最良のプロセスを実現するための有効手段の一つになるのです。今、社会では脱炭素が強く求められています。建物ができるまでのプロセスでどれだけ二酸化炭素を出しているか、削減できるか等ですね。そういった中で、我々は作品を提供するだけではなく、その

作品を作るプロセスでいかに差別化できるかというのが、これから企業の競争力にとってとても重要になります。設計等に提案しているのは、売れるプロセスをつくろうという事です。やはり、今お客様からは、「竹中さん、工事期間中にどれだけの二酸化炭素を排出するのですか」と尋ねられます。重機もそうですね。

（森田）そうですねえ、悪いのは重機です（笑）。

（丁野）運搬もそうですし、そういう作る過程というか、その辺をいかに他社と差別化しているのかということが、強く求められているから、そこに機材センターも色々考えていかなければならないと思います。特にそのキーワードの一つが、脱炭素です。生産のデジタル化も進めていかななくてははいけません。デジタルに強い人材も必要になってきます。

（森田）そうですねえ。ICT グループといいますか、作業所通信インフラの対応ができる人材、役割を担ってくれないかという声もあります。

（丁野）そうですね。例えばクレーンの遠隔操作にしても、データの転送スピードが勝負です。少しでもタイムラグがあると、操作に影響したりするでしょう。そういう事に強い人材が必要です。今までは機械に強い人でもいいかもしれませんが、これからはデジタル化とか、通信とか、AIとか、そういうことに興味のある人や強い人を育てていく必要がありますし、採用していく必要があるかもしれないです。竹中工務店のグループICTには20名から30名ぐらいの、素晴らしい経歴をもった人達が中途入社してくれました。ソニーや日立に勤めていた強力な人材が、1人でも機材センターに入って、能力を発揮してくれたらと思います。

（森田）そうですね。新卒採用はなかなか難しいかもしれませんから。

（丁野）今日、夢洲のスーパーシティ構想を聞きました。コモングラウンドといって、街の色々な情報をデジタル化して集めて、色んな実証実験やシミュレーションを行う様な話です。それが結局、車の自動走行にも繋がるという事です。道路のデータとか、ビルがデータが全部入っていて、それで自動運転ができます。そんな状況にあるから、機材センターも揚重機の対応だけでは済まない時代になるのではないのでしょうか。つまり、物を運ぶということも、どうしたら効率的に運べるかということを考えてなくてはならないですね、特に夢洲開発では。建設MaaSもその一つです。

（森田）今ちょうど自動運転と一緒にチャレンジさせてもらっています。

#### 【安全・品質・コンプライアンスについて】

（森田）安全やコンプライアンスについてはどうでしょうか。

（丁野）まず重大災害0件が絶対です。私はいつも、重大災害が起こる危険性が高い、墜落転落・飛来落下・重機災害・感電災害・熱中症、この5つをいかに防ぐかが大

事だと伝えています。今年、東日本で3件、死亡災害がありました。まずマンホールからの墜落災害。それからバスダクトが下に落ちてきた飛来落下災害、そして先日の重機災害。これらはまさにそれです。機材センターが関与するクレーン絡みの飛来落下や重機災害、感電災害などは、重大災害に繋がりやすい事が多いので、やはり機材センターにとって安全は第一。そういう中で内閣総理大臣賞を頂いたのだから、それに恥じないようにしなさいといけませんね。

#### 【技術の伝承について】

（森田）次に技術の伝承に関してですが、今回、作業所長にアンケートをとった結果、今でも杭・山留工事に関する期待が大きいことを再認識しました。

（丁野）杭や山留工事は作業所がスタートして間もない時で、まだ現場員も十分集まっていないし、最初の計画でつまずいたらもうずっとつまずくからでしょう。

（森田）なかなか何回も建築の人は経験できないので、そういう意味では機材センターにノウハウを溜めていかないといけないと思っています。東日本はそちらに人を割いているのですが、西日本も将来的にはそっちにもっと人を回したいと考えています。

#### 【将来の期待について】

（丁野）将来期待したいのは、まさにデジタルの世界ですね。機械という概念を超えて、やはり情報をどう扱うかっていうところになっていきます。あと、それに強い人材の確保。それと脱炭素を含めたプロセスをどう作っていくかということを目指しています。先ほど MaaS の話をしましたが、例えば、デジタル化された街の色々な情報と建設 MaaS を組合せて、車の位置情報を管理して効率よく荷物を積めるようにする、どこか集配センターを作って、そこから行き来させる、とかですね。また今進めている BIM も情報の塊なわけで、いかにその情報を集めるか。図面は情報です。ここはこういう仕上がりになっているという情報、これを3次元にしているのが BIM ですが、それを今後、街という大きな広がりを見せていき、我々は建築だけですがそこに自動車とか、いろんな機械的なものも繋げていくという、そういう世界。もうそろそろドローンを使って物を運ぶことを、考えてもいいですね。

（森田）はい。少しずつチャレンジさせてもらっています。

（丁野）そんなところですね。

（森田、竹内、嘉本）ありがとうございました。

### 【インタビューにおける期待・激励の言葉】

機材センターの皆さん、100 周年誠におめでとうございます。

日ごろは、作業所の生産支援に尽力いただき、心より感謝を申し上げます。

また今年は、西日本機材センターが、事業所における徹底した安全管理活動が認められ、安全功労者として内閣総大臣賞を建設業で初めて受賞されました。皆さんが日頃より安全第一で作業を進めてきた結果だと思います。この 100 周年と共に、重ねておめでとうございます。

機材センターが関与する重機や機械関連の事故は、ひとたび発生すると重大災害につながりやすいので、引き続き気を引き締めて「安全がすべての作業に優先する」を作業所と一体となって実践して行って頂きたいと思います。

さて今、私達は作業所の生産性を高めるために、新生産システムを推進していますが、機材センターの皆さんも、種々のロボット等の技術開発において、作業所の生産性向上に著しく貢献していただいております。引き続き更なる高みを目指して、技術開発に邁進してください。

そして当社の経営理念である「最良の作品を世に遺し、社会に貢献する」を機材センターの皆様と共に力を合わせて実践していきたいと思いますので、引き続きのご協力よろしくお願い致します。

皆様の益々の活躍を期待しています。本日はありがとうございました。

以 上